

## 資料紹介

# 「青巒甫水慧雲三先生合作扇面」、「煩惱泥中菩提生根」

## 池上正男

itegami masao

はじめに

本稿では、東洋大学の創立者である井上円了が着賛した扇面を表装した掛軸「青巒甫水慧雲三先生合作扇面」を紹介する。

筆者は、以前東洋大学附属図書館で仕事をしていたことがあり、円了の遺墨に接する機会が度々あった。その縁で円了の書に興味を持つようになり、個人的に円了の遺墨を収集するようになった。本作品はそうした収集品の中の一

つで、令和元（二〇一九）年二月に入手したものである。

この作品については、令和元（二〇一九）年一月二三日に東洋大学井上円了研究センター（現井上円了哲学センター）から発行された『CATALOG 井上円了—モノから見る思想・活動・人脈—』の解説（一）において次のように述べ、作品の成立背景について明らかにした。

この掛軸は、大正六（一九一七）年一月一日の日曜日に挙行された「東洋大学創立三十周年記念祝賀式」で記念品として配布された「三学長合作の記念扇」の扇面（原本と思われる）を軸装したものである。

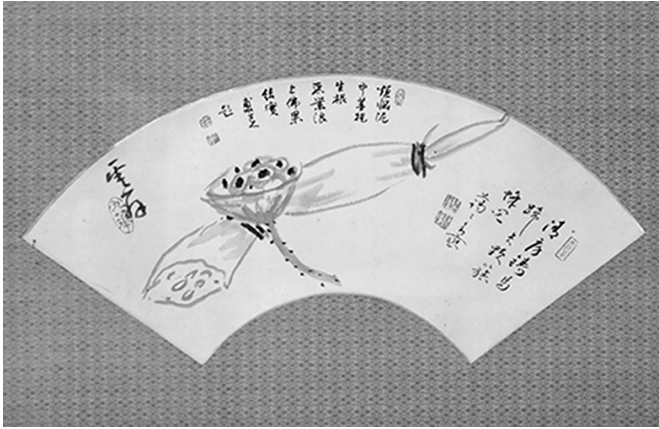
しかしながら同書では紙幅に限りがあり、扇面にある賛や作品と関わりのある人々については触れられなかった。

さらに本年（令和三（二〇二一）年）五月、筆者は新たに扇面の円了の賛とよく似た内容を円了が揮毫した掛軸「煩惱泥中菩提生根」を入手した。そこで本稿では、同作品も新資料として紹介することで、円了が「青巒甫水慧雲三先生合作扇面」に着けた賛の意味を紐解くための手掛かりを提供したい。

1 「青辯甫水慧雲三先生合作扇面」

(大正六年 紙本墨画・墨書、掛軸)

写真⑦ 扇面



①井上円了の賛

〔翻刻〕

〔印〕

煩惱泥

中菩提

生根

惡業浪

上仏果

結実

甫水道人

題

〔印〕 〔印〕

〔書き下し文〕

煩惱の泥の中に菩提の根を生ず  
惡業の浪の上に仏果の実を結ぶ

②大内青轡の賛

〔翻刻〕

〔印〕

御房鑄馬

蹄実頼篋

蜂穴

藹々青轡

〔印〕 〔印〕

〔書き下し文〕

御房は鑄たる馬蹄、

実頼の篋は蜂穴たり

写真① 軸箱 蓋表



写真② 軸箱 蓋裏



写真③ 軸箱 内底



写真④ 軸箱 裏



③箱 書

〔翻刻〕 蓋表

青轡雨水恵(慧)雲三先生合作扇面

〔翻刻 蓋裏〕

昭和六年五月装幀成日 黄洋題 〔印〕 〔印〕

〔翻刻 内底〕

謹呈 昭和十八年七月七日

東洋大学長高嶋米峰先生座下辱知 富田敦純

〔印〕

〔翻刻 裏〕

此書故境野黄洋先生装幀し蔵す 後富田敦純師に渡る 昭和十八年七月

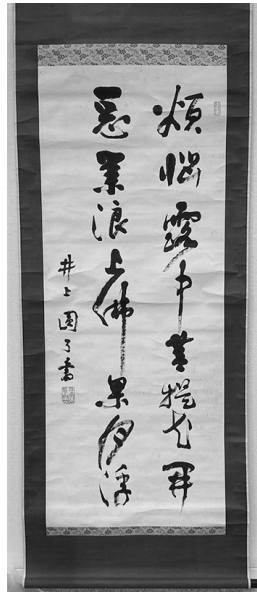
高嶋米峰先生 東洋大学長に就任せらるゝに及んで敦純師之を米峰先生に贈る

米峰先生逝去の後遺族より遺品として余に贈らる 昭和二十四年十二月 高木武三郎 〔花押〕

2 〔煩惱露中菩提花開〕

（大正元年 紙本墨書、掛軸）

写真② 井上円了の書



〔翻刻〕

〔印〕

煩惱露中菩提花開 惡業浪上仏果月浮

井上円了書 〔印〕

〔書き下し文〕

煩惱の露中に菩提の花開く

悪業の浪上に仏果の月浮かぶ

## 解題

### 1 「青巒甫水慧雲三先生合作扇面」

大正六（一九一七）年十一月二日（日曜日）、東洋大学の創立三〇周年を記念する祝賀式が挙行された。東洋大学と同じく井上円了が創立した京北中学校運動場に大天幕を張り、保証人席・学生席・来賓席、壇場を設けて式会場としたが、この祝賀式の様子は、『東洋哲学』第二四篇第一号に記載されている（2）。

当日は天候にも恵まれ、参列者は午前八時過ぎから続々と来会した。来賓として、文部省関係者・東京市関係者・学校関係者・仏教関係者など朝野の名士数百名が来会し、このほかに多数の出身者・保証人・学生が参列した。

この日の来会者には、絵葉書、東洋大学創立三〇年記念

号と銘打った『東洋哲学』第二四篇第一〇号（大正六年一月一〇日発行）のほか、「三学長合作の記念扇」が記念品として配布された。この「三学長合作の記念扇」が、本稿で紹介する「青巒甫水慧雲三先生合作扇面」をもとに複製したものと考えられる。

「青巒甫水慧雲三先生合作扇面」は、東洋大学初代学長井上円了、第二代学長前田慧雲、第三代学長大内青巒の三人が共同で制作したものである。

井上円了は、安政五（一八五八）年二月四日、現新潟県長岡市の真宗大谷派慈光寺に円悟の長男として生まれる。明治二〇（一八八七）年私立哲学館（現東洋大学）を創立し、館主となった。専門学校令による大学設置が認可され私立哲学館を私立哲学館大学と改称したことに伴い、明治三七（一九〇四）年四月一日に初代学長に就任した。明治三八（一九〇五）年二月三十一日に学長を辞任、名誉学長となる。大正八年六月六日中国大連において六一歳で逝去した。

前田慧雲は、井上円了の学長退隠の後を引き継ぎ、明治

三九（一九〇六）年一月二三日<sup>3</sup>に第二代学長に就任した。同年六月二八日には、円了の考えにもとづいて私立哲学館大学を私立東洋大学と改称した<sup>3</sup>。

安政四（一八五七）年一月一日現三重県桑名市の真宗本願寺派西福寺に覺了の長男として生まれる。東京帝国大学文科大学講師をはじめ諸専門学校の講師も務め、この時、哲学館の講師も務めることになった。また仏教大学長となった。大正三（一九一四）年六月に東洋大学長を辞任後、大正一一（一九二二）年九月龍谷大学長に就任。昭和五（一九三〇）年四月二九日、七三歳で逝去した<sup>4</sup>。

大内青巒は、前田慧雲の後を受けて、大正三（一九一四）年七月に第三代学長に就任した。

弘化二（一八四五）年四月一七日現宮城県仙台市に生まれる。曹洞宗の僧照庵のもとで得度した。哲学館創立の際の賛助者の一人であり、また仏教専修科開設にあたっては、その講師として招聘された。学長就任後一年たらずで重病に罹り、大正七（一九一八）年五月には学長を辞することになった。この間の学長職務は、境野哲が学長代理として

執った。辞任後まもない同年二月一六日、七三歳で逝去した<sup>5</sup>。

掛軸「青巒甫水慧雲三先生合作扇面」の軸箱の蓋裏の墨書によると、扇面の「装幀者」は境野哲（黄洋）、「装幀日」は昭和六（一九三一）年五月である。また軸箱裏には、境野哲が軸装してから高木武三郎に渡るまでの経緯が墨書されている。それによると掛軸は、境野哲から富田敦純に渡り、富田は昭和一八（一九四三）年七月七日（「軸箱内底」参照）、高嶋米峰が東洋大学長に就任の際にこれを贈った。

境野哲は、明治四（一八七二）年八月一二日、現宮城県名取郡境野村に土族境野功敏の長男として生まれ、のちに黄洋と号した。井上円了の著作を読み非常に感激して単身上京、哲学館に入学した。明治二五（一八九二）年七月に哲学館を修了、明治四五（一九一二）年に東洋大学教授となった。大内青巒が学長を辞任後、大正七（一九一八）年六月に第四代学長に就任した。大正一二（一九二三）年に起こった東洋大学の紛擾事件<sup>6</sup>により、同年六月二九日

文部省から学長認可取消命令を受け学長職を辞した。東洋大学を去った境野は、昭和八（一九三三）年一月二日、六二歳で逝去した<sup>7)</sup>。

富田敦純は、明治八（一八七五）年五月二日現長野県に松尾仲右衛門の次男として生まれる。明治一五（一八八二）年長勝寺の富田容純のもとで得度した。明治二九（一八九六）年七月哲学館宗教学部を卒業した。高嶋米峰とは同期の卒業である。また明治四四年三月に講師の称号を授与されている<sup>8)</sup>。大正九（一九二〇）年豊山大学長に就任。昭和七（一九三二）年真言宗豊山派管長となり、昭和三〇（一九五五）年、八一歳で逝去した。

高嶋米峰は、明治八（一八七五）年一月一日現新潟県中頸城郡の真宗真照寺に宗明の長男として生まれた。明治二六（一八九三）年九月に上京して哲学館に入学、明治二九（一八九六）年七月に教育学部を卒業した。昭和一二（一九三七）年六月東洋大学教授になったが、翌一三（一九三三）年一〇月に辞任した。昭和一二（一九三七）年七月から二期六年にわたって学長職にあった大倉邦彦にかわっ

て、昭和一八（一九四三）年七月一日第一二代学長に就任した。大正七（一九一八）年学長に就任した境野哲以来二人目の校友出身の学長であった。昭和一九（一九四四）年一〇月学長を辞任した。一〇月二五日、七四歳で逝去した<sup>9)</sup>。

境野哲と高嶋米峰は、田中治六（明治二四（一八九一）年七月哲学館卒業）とともに哲学館の「三羽鳥」とも言われ、かつては仏教清徒同志会や新仏教運動の中心人物としてともに活動した間柄であった。しかし大正一二（一九二二）年の紛擾事件において、境野は学長派として、高嶋は反学長（反境野）派の校友有志団代表の一人となり袂を分かつこととなる。

高木武三郎は、大正一五（一九二六）年三月東洋大学専門学部倫理学東洋文学科を卒業、卒業後は校友会評議員を務めた。高木は、高嶋米峰の逝去後（昭和二四（一九四九）年十二月）、遺族から扇面の掛軸を贈られ、掛軸の箱裏にその来歴を墨書した。

## 2 「煩惱露中菩提花開」

この作品は前記のとおり、令和三（二〇二二）年五月に筆者が入手したものである。内容は「青巒甫水慧雲三先生合作扇面」の井上円了の賛とよく似ているが、使われている語句に違いがある。

「煩惱露中菩提花開」では、「露中」、「開花」、「月浮」が、円了の賛では、「泥中」、「生根」、「結実」になっている。円了はこの語句の違いに何か意味を込めたのだろうか。

「青巒甫水慧雲三先生合作扇面」にある円了の賛の意味を紐解く手掛かりとして、この作品に関係する資料を求めていたところ、筆者にはいくつかの発見があった。

一つは、東洋大学井上円了哲学センターが所蔵する井上円了の書の中に、同一の内容のものが存在することが判明した（写真<sup>⑩</sup>参照）。このことから本作以外にも、同一内容ないしは類似した内容の作品が存在する可能性がある。

もう一つは、円了の著作『仏教心理学』<sup>⑩</sup>に次のような記載がある。

その他、二、三の書に見るところの一心の真相迷悟の状態を引用すべし。

煩惱の露中に菩提の花開き、悪業の浪上に仏果の月浮かぶ。（『禪家語録』）

煩惱露中菩提花開、悪業浪上仏果月浮（『禪家語録』）

そのほか『大乘哲学』<sup>⑪</sup>には次のような記載がある。

また禪家の語録に、

煩惱の露中に菩提の花開く、悪業の浪上に仏果の月浮かぶ。

煩惱露中菩提花開、悪業浪上仏果月浮、  
これ煩惱即菩提、生死即涅槃の意に外ならず。

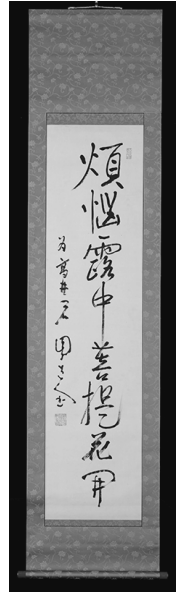
ここにある『禪家語録』（『禪家の語録』）がどのようなものであるか、現在のところ不明である。しかし、「青巒甫水慧雲三先生合作扇面」にある井上円了の着賛と「煩惱泥中



菩提生根」の意味を円了の思想や哲学の面から明らかにするうえで、手掛かりの一つになるのではないだろうか。

写真④ 井上円了哲学センター所蔵「煩惱露中菩提花開」

(大正五年 紙本墨書、掛軸)



おわりに

「井上円了先生の書」研究グループの本田氏は円了の書について、「書を見てその中に筆者の人間性を観取できるのは行草体が最もよい」と中国清朝の代表的書論家である劉熙載は言っている。円了先生の書作品の殆どが行草体である。書ほどの芸術より端的に人間性が表現されるものである」と述べている(12)。

円了は延べ二七年間といわれる全国巡講で多くの書を残

している。今後も新たな円了の遺墨と出会い、それらをと  
おして円了の人の柄やものの見方、考え方を研究して行きた  
い。

### 【註】

- (1) 『CATALOG井上円了―モノから見る思想・活動・人脈―』東洋大学井上円了研究センター、二〇一九年、五三頁。
- (2) 『東洋哲学』第二四篇第一一〇号、東洋哲学発行所、一九一七年、五一―五八頁。
- (3) 『東洋大学百年史 通史編Ⅰ』東洋大学創立百年史編纂委員会・東洋大学井上円了記念学術センター、一九九三年、六一三―六一四頁。
- (4) 『東洋大学百年史 通史編Ⅰ』東洋大学創立百年史編纂委員会・東洋大学井上円了記念学術センター、一九九三年、六〇九―六一〇頁。
- (5) 『東洋大学百年史 通史編Ⅰ』東洋大学創立百年史編纂委員会・東洋大学井上円了記念学術センター、一九九三年、六二九―六三〇頁。
- (6) 『東洋大学百年史 通史編Ⅰ』東洋大学創立百年史編纂委員会・東洋大学井上円了記念学術センター、

- (7) 一九九三年、八一五―八六二頁。  
『東洋大学百年史 通史編Ⅰ』東洋大学創立百年史  
編纂委員会・東洋大学井上円了記念学術センター、  
一九九三年、六五―六五二頁。
- (8) 『東洋哲学』第一八篇第四号、東洋哲学発行所、一九  
一一年、五〇頁。
- (9) 『東洋大学百年史 通史編Ⅰ』東洋大学創立百年史  
編纂委員会・東洋大学井上円了記念学術センター、  
一九九三年、一二九七―一二九八頁。
- (10) 井上円了『仏教心理学』(『井上円了選集』第一〇卷、  
一九九一年、一六四―一六五頁)。
- (11) 井上円了『大乘哲学』(『井上円了選集』第五卷、一  
九九〇年、四二〇頁)。
- (12) 本田春玲「井上円了先生の書」の研究(『井上円  
了先生の書』遺墨集とその研究 第二集)「井上円了  
先生の書」研究グループ、一九八四年、一一五頁)。